



13
459

柳菴栗原氏校訂

重修真書太閤記

東都書肆 知新堂發兌

天 第廿拾九号 共百拾冊



459

重修真書太閤記凡例

明保五年十月四日購求

一真書太閤記世小流布とる久々童蒙かゝる
ことを信以予一日此書を檢閲し小瀨甫菴
乃太閤記夕顔菴の豊臣家譜竹中重門此豊鑑梯
屋喜左衛門祖父物語等小比較し其の同異を標
記し誤脱を訂正し朱墨塗抹ほとんと反故紙乃
如し再度讀過して又少く改削を加え終り題小
重修の字残加え以て流布本と別け考へ願ふ
ハ小兒輩を以て俗本の偽をすて英雄の真面
目をし知し姦黠の詐謀と用兵乃計略と目と同
志く言へうはるる或知あめんう為なり

一 太閤乃所生姓氏諸書おかしき所は太閤その母
と尊んく大政所と稱し其乃終を送りて天瑞寺
戎草創を然して繼父竹阿彌ありひは彌助昌吉
り為し何の追善をかきむひし沙汰を然らそ
後奈良院乃落胤あり凡人の胤子小あしはる
りやこれらさかその事實は沿く考證を加ふ
一流布本の事實荒涼迂怪妄談小近しとおもはれ
ることもさしおし然ることもおし尾濃の間
野老乃口碑は傳え神社佛刹の古牒は徴とくさ
るも少からし然る時を概し荒涼妄談とを
おしおし依り他の譜牒は参考し古簡佚文は

校正しその偽ありしを證を
一流布本のうち俗手書寫乃はいふ小意を以て改
竄をしとゆふ條も又あかしおしれらる正説は
就し筆削を加ふ
一 此書重修の本意流布本は偽を正し俗手の竄入
を改めなれしきたる流布本は行らん戎歴
幾はよりつゝ強て小瀬甫菴の本は同一おしんと
戎欲せし
嘉永二年己酉歲九月 栗原孫之丞信允

大司記凡例



重修真書太閤記初編總目錄

卷之一

昌盛法師願文祈誓の事

并昌盛還俗彌助國吉と改る事

中村昌吉織田家よ仕ふる事

并持菰中納言保廣卿女子乃事

卷之二

秀吉公尾州中村出生の事

并源右衛門日吉丸小異見乃事

岡崎家由緒の事

大隈言平系系上

并日吉丸蜂須賀小六政勝に會事

卷之三

日吉丸即智變化の事

并蜂須賀小六路金と失ふ事

日吉丸故郷中村小歸る事

并日吉丸老婆と食と求ふ事

卷之四

昌吉落髮竹阿弥と改る事

并日吉丸松下に奉公改名乃事

藤吉郎武術試合の事

并松下加兵衛尉駿州へ出馬乃事

卷之五

北條父子駿州へ亂入の事

并小田原北條家由來乃事

今川北條富士川合戦の事

并中村藤吉郎初陣高名乃事

卷之六

藤吉郎氏と木下と改る事

并之網藤吉郎と婦と嫁とる事

藤吉郎松下が危急と救ふ事

并今川義元北條氏康和平乃事

卷之七

大隈言平系系上

藤吉郎大黒の像と碎き大志と顯たる事

并藤吉郎高吉尾州中村に歸る事

竹阿弥夫婦藤吉郎へ異見の事

并藤吉郎父母小所存と語る事

卷之八

織田家由來の事

并信長行跡異相乃事

織田信秀終焉の事

并平手五郎左衛門馬と惜む事

卷之九

平手中務大輔政秀諫死の事

信長遠大の智と述る事

齋藤道三信長と對面の事

并武藏守信行誅せらるる事

卷之十

織田上総介狩獵の事

并藤吉郎狩場へ推參直訴乃事

信長藤吉郎が素性と尋む事

并藤吉郎勤勞出情乃事

卷之十一

木下藤吉郎役人の員ふ入事

并前田犬千代藤吉郎と懇情乃事

犬千代藤吉郎り婚禮と媒妁の事
并又左衛門木下と婚と望む事

卷之十二

藤吉郎藤井が娘婚姻の事

并山口父子の奸計乃事

山口九郎次郎の退役の事

并藤吉郎普請奉行と奉む事

卷之十三

普請方人夫等の惡心の事

并木下藤吉郎智謀乃事

人夫等の惡心を改め出情の事

并木下御朱印を引替忠誠乃事

卷之十四

木下藤吉郎良策を獻む事

并森三左衛門商人とり笠寺へ赴く事

木下が智戸部新左衛門の殺害の事

并山口左馬助笠寺の砦を攻る事

卷之十五

山口父子の後悔恐怖の事

并北畠具教尾州攻評定乃事

織田信長佐屋川出張の事

并木下藤吉郎進退勝敗を説く事

大隈言不糸糸目録

重修真書太閤記初編總目錄

卷之十六

織田北畠合戰の事

并木下藤吉郎佐屋川先陣乃事

勢州方摠敗軍の事

并福富平左衛門金龍の筭と失ふ事

卷之十七

福富平左衛門勘氣と蒙る事

并木下藤吉郎御加増と賜らる事

信長勢州發向評定の事

大隈言不糸糸目録

大隈計本録

并木下密いそりよ岩倉責いさくらぢめと勸すすむ事

卷之十八

岩倉責勝家高名たかのみの事

并木下柴田しばたり執とらふことと頼たのむ事

藤吉郎柴田小密計せうみつけいと示しむ事

并堀尾忠左衛門父子武勇ぶゆう乃事

卷之十九

岩倉の城落去らくきよの事

并大澤主水間者おほさわぬまとあり織田家小仕官しきんの事

信長鎗やり乃長短得失ちうたんとくしつ評論ひやうろんの事

并主水藤吉郎中間ちうげんと預あづかり鎗指南やりしゆん乃事

卷之二十

上島主水木下藤吉郎中間ちうげんと以もちて試合しあひの事

并藤吉郎主水ぬまか間者まなる成計なりけいり知事

木下藤吉郎遠計えんけいの事

并浅野弥兵衛出所いづしよ犬山騒動いぬやまさわうどう乃事

卷之二十一

藤吉郎犬山騒動と鎮しづむ事

并信長今川上洛防戦評定ひやうていの事

卷之二十二

木下藤吉郎軍慮ぐんりよと述のむ事

并上島主水木下かみが諫いさめと支さゆる事

大正記補遺目録

主水老臣等へ木下と讒する事

并柴田佐久間藤吉郎と除んとする事

卷之二十三

木下上島鎗術試合の事

并大澤主水織田家へ歸伏乃事

信長ふくび防戦乃評定の事

并藤吉郎合戦と勧る事

卷之二十四

戸部新十郎零落の事

并木下智謀鳴海乃城と攻る事

朝比奈備中守戸部が愁訴成執成事

并義元山口父子と召る事

卷之二十五

山口九郎次郎武勇自害の事

并戸部新十郎父の敵と討事

織田家の老臣等木下と不快の事

并藤吉郎兵書問答乃事

卷之二十六

木下平手陣法と論む事

并藤吉郎加増立身の事

織田家軍議決定の事

并信長所々要害若と構ふる事

大正記補遺目録

大目録

卷之二十七

木下藤吉郎江州へ使節の事

并藤吉郎高吉秀吉と改名の事

卷之二十八

藤吉郎加勢の兵を率ゝ歸國の事

并今川義元鳴海表出陣の事

前田孫四郎勘氣の事

并藤吉郎織田殿へ諫言の事

卷之二十九

大高城兵糧運送の事

并織田殿諸士を集め酒宴の事

藤吉郎前田小義とむむる事

并今川義元朝臣軍勢手分の事

卷之三十

鷺頭丸根兩城合戦の事

并佐久間大學助討死の事

岡崎乃御軍勢大高へ入城の事

并信長出馬熱田宮奇瑞の事

重修真書太閤記初編總目錄終

大目録

重修真書太閤記初編卷之一

昌盛法師願文祈誓乃事

并昌盛還俗彌助國吉と改る事

天地も萬物乃父母人ハ是萬物の靈也就中聰明仁
 惠あるハ元后と御系元后ハ則民乃父母あり我扶
 桑の貴きといハ小國外ととも神威比徳高く王嗣の
 絶ふそおしおを傾んとするものを皆こしく
 天誅ニ伏せしと云ども猶そは理と了り得て良
 もすれハ諸國の武士王命とせむ亂とを源平
 乃兩家朝家と守護し謀反の輩あはハ馳向くおを

と征は然る小人皇七十七代後白河院即位ありけ
るは新院崇徳院と御謀反思召立と源平の武士父
子兄弟相つらむ敵味方と形り合戦と源氏六條
判官為義新院乃御方とあり嫡子左馬頭義朝を
禁中小伺候は義朝院の御所へ押寄とと攻破る
為義朝かち降参はと云ども罪科遁れがごとく終
小義朝小仰ふことを斬せらふ然しては源氏の
威勢日々に抑とつて平家安藝守清盛勲功と募り
一人朝廷と跋扈は義朝とを憤り平家と滅さん
とせし小却朝敵の名を被り合戦と打負尾州野
間乃内海と於て長田庄司が為小生害をわたり

後ハ平氏一統の權威さかん小王命と忽結し我意
小骨張ととくも志を壓ふる勇烈の將軍出
ば仙院國母三公九卿平氏の為小困窮とると廿餘
年天暴惡小福ひたまひ治承四年は秋伊豆國
乃流人たる前右兵衛佐頼朝東八ヶ國に軍兵を
催促して義兵と擧ぐ平家を亡し上ハ主上皇の
宸襟を休め奉り中ハ攝政関白公卿大臣の鬱憤
をく下と父祖親戚の耻辱を雪めんを企らむ
ける小元より関東八ヶ國ハ源氏乃大祖貞純親王
六孫王經基多田滿仲河内守頼信伊豫守頼義八幡
太郎義家六條判官為義下野守義朝まぐ八代相傳

して兵馬を管領せしむ。由緒等閑あり。祢む誰り
 其催促おそむくべき我もくと馳集りてやどふ
 平家と富士川は矢合してあまは勝遂お屋嶋檀浦
 ふ於る悉くおれを誅して廿餘年の蟄懷を開き四海
 静謐に治り王化至らぬ隈もかく萬民安堵の思と
 なし。うは頼朝お征夷大將軍日本總追捕使乃權
 を授け狼籍謀叛の輩を鎮め盜賊亂妨は徒を誅罰
 心よ任をさせ給ふころおと朝家すこぶる肩代休
 むるに近しと云ふを抑まて王威おと治へ憲法を
 たぶくちどおたり頼朝頼家實朝三代將軍の嚴威
 と遅くおそむひくる後頼嗣頼經二代是を相續し

又宗尊親王惟康久明親王守邦親王小及迨とて
 九代百四十餘年の際を鎌倉將軍北世と云此時北
 條時政義時泰時經時時頼時宗貞時高時父子代々
 相續して執權たり後鳥羽院義時と亡し天下成
 叡慮よ任せしむんとおされ合戦成起さしも叶
 せ玉り後鳥羽院ハ隱岐國順徳院ハ佐渡國土
 御門院ハ阿波國へ遷幸なり奉るおとを承継の亂
 と云これより後天子鎌倉を亡し政務成禁裡にお
 執行せらるる思召さるる九十五代後醍醐院
 乃御宇に至る一旦隱岐國へ遷幸ありかとも
 御本意の如く高時一族を討滅され公家一統の世

とあさきと云ふ文武の二道並び行くれば
政道正しゆふ謂なけむ足利尊氏征夷將軍
の幕府と再興して天下まゝ武家乃掌握小歸鹿
苑院將軍義滿の時より公方此号を錫より海
内乃大小事とて將軍の指揮ふより成
り然るも尊氏八代乃將軍東山義政の時將軍の
威權おとろへ細川山名此兩家互に勢を張る争を
起せども將軍とを制しあふとあつて應仁乃
大亂と云是なり斯くて後五畿七道麻の如く乱を
一日片時も安穩あるとなく晝夜修羅乃苦患を受
ると百二十餘年然る成天正十八年小至る亂賊と

切鎮め天下一統静謐と歸し弓ハ袋と太刀ハ鞘民
ハ耕作の業と安く高賈ハ有無乃用と通傳聞
堯舜乃世とゆやも斯やあんと諸人萬歳を唱へ
快樂と心にまゆをふ時と与せし豊臣關白太政
大臣豊國大明神の神徳と云へし其の神徳小報せ
むらためと始と尋ぬと叡山西塔學林院の僧と
昌盛法師と云者あり俗姓を江州淺井郡長野村乃
百姓長助と云者の二男なり八歳の時山門小登り
薙髮して昌盛と號し天台乃三密極めくを明
ら免三千此事理一心と徴し滿山乃法燈と仰讚以
愈々程遠くくと見し昌盛別と思立るとあり其

大問己初編六一

ヨ

如何と云ふ今天下亂極まりぬ我碩學の徳を以て
衆人を化度をもとむるは是有信乃檀越の
志なり此騒亂をあげめ天下成泰平にふし萬民乃
塗炭に苦む成救く廣大無邊の慈悲なるべし然
もとも我累世の武士にあはば暴戾乃兵士を降伏
せしむる力たはばと云ふと思ひ起さば大願空敷
すけづさふあはむ我誠心神佛納受まはば何
ら感應あはばらんやと勇猛力を憤發しまげ竹生
島辨財天小一千日乃歩とまらば丹誠を凝して祈
奉ると云ふも我の志なり成蒙らば昌盛歎息し
云く我一身の後榮をわたりて只天下の乱を靖め

大願言

て民の急を救はんと欲するの志あり
大望あり神乃力あも及ばせ給ひぬまや去かから
辨財天を祈りて相應を祈る小依く示驗を蒙ら
ぶと覺えたり所詮我一命と此願望は捨ば望を
違はばと志の失あるぬ道理ありと料簡を定め
竹生島辨財天ハ微音天女とハ妙音樂天とも
中降魔の大將として西北に坐し弓箭の棟梁
として東南に向ひあひ本地を四辨財天大士
垂跡を一陰陽の明神なりと源平盛衰記の
考り但明神と云ふ稲倉魂命あり天平三年に
現をむひしとあり今ハ社領三百石社僧天台宗

大願言

五

本業寺と國花萬葉記より
 今宵を限りて信心を凝して通夜かゝる曉が
 夢も現もなく端嚴微妙の神女出現し
 告給ふやう汝が所願満足せよ但今乃時いまだ
 早し汝が子孫よあるべし怠るをばと諭して
 神女の何地へう見つどなりあふ昌盛奇異の思ひ
 とおし我子孫おあるべしとの示現ハ我は還俗せ
 よとのおしるを還俗し妻子と具せんを鎮
 宅の秘法を修むべしとして同國荒神山小登り斷食
 して靈符成祈ると二七日は満ちる曉光明赫奕た
 る天童壇上小顯を告むく汝もや還俗し時

乃至を待べし汝子孫天下を平治して民を安樂
 ありし威名万代に傳はるべしと天地人三合の
 數をば備せば少も疑ふをば努力よや法とめ
 よやと勅すよと思つて夜ハほのくと曙りて心
 神快然とさるるを兩度の示現を蒙るる願望
 成就し子孫海内守護乃將相たるを掌る視が
 如し然ば還俗すべしと俄小狂氣の如くにり
 かし山門を遁れ出古郷淺井郡長野村に歸り兄長
 左衛門が家小同居に
 一本木下系圖は佐々木高島隱岐守高信八代越
 中守高泰此子氏泰木下郷小住をいかに木下源

四郎と云母ハ浅井郡長野村の人あり種姓定り
 あらばと云母ハ氏泰の弟小僧あり東塔學材坊住
 と注を此僧恐くハ昌盛なりべし
 元より實の乱心あり祿を幾日も經ざれば本復を
 ささども歸山乃けしきもとて徒に光陰を送る
 うち小髪長く延くいはし三衣を脱すく褐布の
 半被脛切乃姿となりし小長高く色白き生を付と
 云今年三十三鄙ふあつびある美男なり婿よせむ
 やと思ふものも多うふ中母方の叔父弥五右衛
 門と云りけり女十七歳名とば於高と云容色美麗
 小心むへ優ふやけりかり々色ば近郷近村の若者

心とけ所縁をりとめし妻ふせんとも望めども
 父母本人とも又何と相談せばあまハ弥五右
 衛門夫婦の心小我甥なり昌盛法師り還俗せば
 婿とせんと思ひ娘もまさ此人の妻ふあつむやと
 おりんとて出家を墮せしあんと云とんを耻く
 色あも出さば昌盛もまさ此女と言よりみむや
 とおもひくふれどにいはし互小親しくあつむ
 ひ浅くぬ中となりて於高懐胎乃身とありしり
 昌盛ふく喜びありとて月満る平産せん時
 墮落僧れ子と云せんも口惜くふ産し然らば此處
 と産處とせんを然る産くつて夜にまを浅

大隱言集卷一

二

井郡と立退美濃國よりの尾張國愛智郡中村と
云所^{ところ}は知^しりありけしバ夫^{おとこ}を憑^{たの}りて移^{うつ}りす中
村弥助國吉と名乗在地の人乃たぬふ右筆して朝
三暮四の助^{たすけ}とありとあり

文明十一年己亥ハ黄帝九宮經よいてゆる太歳
害氣大陰乃三神相合此歳あり上元より五千
五百八十年終り第卅二周上元の初年なり即昌
盛法師山門遁世乃歳と木下系圖に云ふ尾
張愛智郡中村と云ハ倭名類聚鈔より出^いり郷名ハ
く文和三年四月記セ^し熱田御神領乃目錄ハ愛
智郡上中村畠廿二町八反云くとありとあり今

中村ハ太閤山常泉寺と云日蓮宗の寺あり元和
九年十月十二日圓住院日誦上人開基せし處
境内ハ太閤幼時手自植むハ狗骨樹あり尾張
圖會^{あひま}此寺地をぬら^ぬら太閤出生乃處を云
常泉寺の西ハ加藤肥後守清正出生の地あり或
ハ清正出生地乃南ある竹藪の邊太閤屋鋪の跡
ありと云名護屋より西ハ當り一里ハ近
兎角をほ^ほと月満^{つきみち}國吉^{くにきち}妻於高男子と産
あはせけ^{あは}せ竹生島の示現ハ應^{おた}ト乱^{みだ}れ世
むべ^{むべ}器^きハ當りものありと最愛大形なり
生長^{せいじやう}中村弥右衛門昌高と名乗る生年ハ文明十

二年庚子卯り弥右衛門昌高乃子と中村弥助昌吉
と云永正五年戊辰の誕生し太閤の父たり此

節古寫木下系圖
異本の依く補ふ

中村弥助昌吉織田家仕ある事

并持萩中納言保廣卿女子乃事

昌盛法師の所願むかへば男子と得ると云共

時機いよご熟せば弥右衛門昌高の尾州中村の里

よ終了と取と云ども父が本意とよく守りあはすと

弥助昌吉小教訓せしめ昌吉まゝ父祖の志成継

文武の藝とよく別して鎗劍の伎小妙と得たり

その頃尾張國ハ斯波治部大輔義統の領あり春

日井郡清洲小在城の家老と織田備後守信秀とて

武勇勝と良將あり昌吉此人小従軍功と重祿

立身せむやと思ひくは鑊足輕乃關のありけ

る小加りて奉公しけりまゝ昌吉廿八歳此時

昌吉永正五年戊辰小生る廿八歳天文四年乙

未卯りこの時斯波治部大輔義統を清洲と居城

とあし織田信秀の海東郡勝幡乃城小生

天文元年愛智郡那古野の城主今川左馬助氏

豊を追出しなぐ那古野小移り天文四年同郡

古渡小城を築て移り那古野とを二歳小ある吉

法師尤も譲りし之

昌吉軍小從小度ごと一身を捨る振舞しかば信秀
ふりく感し勲功を重ぬ終るを一方の大將と為む
やと思ひ居たりけふ三州あき今川織田合戦乃
時弥助昌吉先陣小進敵二人突ふせ首を取立上ら
んとする處へ敵三人押来り昌吉小突るか、且終
昌吉う太股を志くか、又突急處あきむたまり
得は尻居よぶふと倒るるか、又味方大勢とるを
寄弥助を援けく引退く信秀今日乃弥助が働比類
か、と感賞し竹流しの金多く賜り中村小歸り
疵を療治せむ

信秀と今川方と合戦せし天文四年十二月五

日三州伊田郷合戦同五年二月信秀八千人を率
して大樹寺小陣し同九年六月六日安祥合戦等
世普くあきと知猶此外も多うあべし昌吉の
傷さし合戦何年と云く成知らは
然るに此疵ありひの外深手あき骨よめ、且平愈
の期もあき難しと身乃暇乞ふ信秀も深く是
と惜し猶金錢衣服多く與え油断る療治とる
しとて身の暇をばゆるされど弥助厚き主恩と感
歎し怠らば療治せし程小疵ハ全く愈しあき右
の足屈まき歩行自由を得むかくては武士道立難
く立身の望叶ふべし、べたしひ恩賜の金銀餘慶

ありては徒小米穀を費し喰ふ飽うらばはるる傘を
とりて一日乃食に充しと形り又昌吉の妻は同
郡下中村鍛冶五郎助といふ者の姪あはる於仲と云
心届けし賢きものあはるも容貌もあはるこて
迎ふる人あはる色は叔父の許に養ひて居たりし
と我まともふや父と持萩中納言保廉卿と云去明應
三年五月夏夜霜と云題を内裏より賜たり
月影の木の間くは村消る踏ふ跡あはる夏の夜霜
と詠して獻すは小讒者ありし御代を恨める心を
含めりと奏聞せしは帝逆鱗まはる保廉卿成
尾州村雲の里に配流せしは

明應三年の後土御門院乃御宇あり此時皇居を
土御門内裏と云此年將軍義植義澄の争ひあり
都も穩やうあはる又持萩中納言と云人考ふは
所か
保廉卿尾州小下向ありて日月いまは地ふあはる
天道誠を照し玉と終は讒者乃謀言を訂され
あはる召直はる年月もあはるべしと云
あはるあはる都の空に村雲のあはる住居も浮世ありたり
と詠しあはるは憂ふとらしうは流人の身あり
はも賤の隙あはる辛苦をば見聞しとも有まはる成
こ又徒然乃慰めよと云やあはること遊び歩行なり

大田記初編卷一

二

給ひたる御器所村といふ處の獵師次大夫が娘
 いらある宿世の縁ゆやけりおと互におりい合
 水とくはと契とあひせえて配所のうきとこと
 色あふよはがふあゝあひたるよ此娘をぬ
 身となりて女子一とと海産せよ
 御器所村ハ尾州愛智郡にて名護屋の東南乃近
 邑あり鎌倉右大將頼朝卿の妹一條權中納言能
 保卿の室家此領なる由東鑑にえり今此村
 小御所屋敷と云あり持萩中納言居住の跡と
 云天正記小太閤乃母公大政所の父りちと中
 納言とやせ一人遠流は處せられ大政所二歳の

秋尾州飛保村雲と云処は假居をいめ詠め屋
 都の月よと誦と由も飛保村雲の葉
 栗郡あり飛保の今猶存村雲を今村久野と
 云但御器所村とは丹羽春日井二郡を隔て西北
 小當りて遠く大政所を天瑞寺贈准三宮從一
 位春岩桂公大禪定尼のふりて永正十一年甲
 戌乃誕生あは二歳乃時とは十二年乙亥乃歳
 のあとり
 此子二歳の時保廉卿歸洛ありかども配所の辛
 苦積りけふもや病患を發し朝參もあまは様
 療養の力を盡されは驗なく定業ふもや有らん

都みやこへ還かへり六十日と云ふ卒つひ去さりぬひ々る尾州おし州まで
を今いまやくと迎むかひ乃のち下向げむかを待まちつるよまの期きも過すまはば
若わや心こころ替かりぬやあらんと思おもひあがら二歳
の女子むすめを懷いだき都みやこへ登のぼりて尋たづねるよま也なり彼かの郷さとハ世よふ
おと人と聞き大おほいおとほきあはし偶たまたま歸かへ洛らくの期きを
待まち得え嬉うれしとおひひし甲斐かいもぬく早はや世よなりぬひ
みしものうさては残のこる我わが身みをさもぬくばあは
果報くわいほうはさあき此この子これ行末ゆきすえと抱かかりぬ一ひと歎なげきしを
ぞと斯かくくあるある事ことあはぬ殊ことごとく更さらその頃ころ都みやこの
細川ほそがわ澄元すみもと高國たかくに兄弟あにがた相争あひまりぬ穂ほやう好このく福ふくを母はは又
女子むすめを具たもつ古郷ふるさとへあへり一ひと兩年にふたとしを送おくりぬ父ちち

次太夫つぎたふも病やまみ染しぬ忽たちまち終つひ焉なり母ははハおの思おもひは堪たま
兼かて墓かぶるぬをバ幼稚ちよじの女子むすめとき二人ふたり憑たのむ方かた
好このく過すましけふうち小重こぢりなる物思ものおもひ乃のち積つりぬ終つひ
小空こぞらし〜なりしかば今いまハ五郎助ごらうすけより外ほかは便べん
るべきものもかけぬその家いへ小養育こやしをぬれ人ひとと
ありし好このく然しかるよ斯人このひとの媒まへりて昌吉まさきちが妻つまと
るこ兒こ享祿きやうりく四年しに四月しがつ乃のちをかば於お仲なかつ十八歳じふはちさいなり
或あるハ天文二年てんぶんににねん廿三歳にじふさんさいの時ときと云い説せつもあはせぬ天
正廿年ていせいににねん七十九歳しちじゅうきゅうさいと云いより推おしハ永正十一年えいせいじゅういちねん甲戌かつか
乃のち生なれ天文二年てんぶんににねんハ廿歳にじふさいなり太閤傳たいかうでんと云い書かふ
天瑞寺てんずいじ大禪尼だいぜんにハ二歳ふたさい少すくなくく父ちちを喪なくし京きやうへ上のぼり十

六歳より尾州へ飯り十八歳まで弥助昌吉の妻
とあると云り然らば十六歳を享禄二年あつ後
奈良院踐祚ありはとも即位の禮いすど行く
せらとばふ間のをりさて太閤天文五年丙申
又誕生はれバ塩尻小萱津光明寺支院が有姓の
官女を賜りて還俗し中村弥助と稱しやぐく
誕生ありし太閤まで實は後奈良院の落胤か
と云説の誤と知べし
と云太閤秀吉公乃御母堂後小大政所と稱せし御
事なり

重修真書太閤記初編卷之一終

重修真書太閤記初編卷之二

秀吉公尾州中村小出生乃事

并源左衛門日吉丸又異見の事

中村弥助ハ持菽中納言の息女今ハ鍛冶五郎助
姪なりける於仲と迎へ妻と相し中睦しく月日を
過しけるよいほしう妊娠して臨月小ありはば
今やくと待ちど安産ハ志い共女子なり更ふ
よろこむ父祖の遺言もあり男子を志祈り
逆さく力を落しける體をさく妻も氣の毒又思ひ
何卒男子一人授け玉へと同村小鎮座まはる

日吉權現へ祈誓し夫は知せば日恭しく信心とこ
らうらう

今按小此女子ハ太閤乃姉少く尾州知多郡大高
村の長尾武蔵守乃妻とあり関白及び丹後少將
大和此秀俊等の母より武蔵守吉房ハ後ニ三位
法印一路と云ふ色を年表に推小天文三年甲午
の誕生ふとば昌吉乃妻廿一歳の時なり日吉權
現乃社未詳但中村小八幡社あり別當と醫光山
長圓寺と云弘治元年秀吉公乃造營小して天正
十八十二月加藤清正再修し拜殿と慶長三年清
正の母建立せし由
尾張名云恐ハ此社なるべし
勝團會

然るも或夜の夢小日輪懐中に入と見てはくたぐ
あゝぬ身とありくばりや祈願せし驗ありて
神の授けよ小所よりやあゝんかと心中小深く悦
び弥助よと物語せし小父祖より段々遺言せしと
もほり持てこを誠ニ正夢ある處然バ天神より
授けよ小もあふして決定男子あゝんと夫婦共ニ
臨月と算つて待たるに十月も過て何の氣もあ
又一月過せると更小氣色もななく終に十三月め
當り天文五年丙申正月一日丁巳寅一點ニ男子
誕生

豊鑑小天文六年丁酉生と云豊臣譜もまこと同

然とてども夢むる時六十三と云と幼名を日吉と
 云す猿と称せしむ推考されば天文五年丙
 申の誕生ありと疑る又一書は正月一日卯一
 點と云本卦ハ噬嗑九四形剛を以て柔に居艱
 難正固小利と云義此公乃一代成解とす
 大乃時弥助の家の上小當々彗星の如き靈星出現
 してその光常此星小倍し恰も白晝乃如し生長の
 後戰場小臨むと軍危ふけと必此星陣上と現
 ると云といひも勝利とありしこと然るは此兒乃
 相とて異體なれ色赤く猿眼ありて眼中をば
 瞳子二あり頬先は五川の黒痣あり尋常の兒

とお那トウバさかぐ猿のおとくとなり
 繪本太閤記より生きたる歯を生くと云也其
 據をくらげ

其く免日吉權現へ祈り且日輪の瑞夢ありと云
 幼名を日吉丸と名付たり然れども近隣乃輩その
 名をば呼ぶものなり猿之助とて唱へける弥助とて
 をきくと云とも猿ハ山王乃召遣ひて小獸ありて
 まめをうなるをばと聞此兒無事小生長とて瑞
 相ありとて親も折にあきては猿之助とて呼ぶ
 出づれば智恵はく小従ひ我名とありてうぬげ
 笑ひなどして終は實の名とて呼ぶハなり六七

歳の頃も形は隣家の子等と遊ぶは形八年より
下小さくれどもおろろと大きく更ふ他の子等
下に立ちぬ

天正十八年太閤小田原征伐より下向あり
と尾州中村に一宿ありて此處を我出生の地
なり百姓共より作り取らせさせむやとわたりぬ
但おろろ仁王と異名せし童有へし我幼年の時
とも小草を刈りて我より年少し長たりし故
いさかひく鎌柄ありて叩くことあり其遺恨今
も忘れぬとありし由祖父物語より合せ想ふ
ぬ

村中の老少打寄て實は貌も心も猿に似しは者哉
斯る子なきども親ふればおろろ不便し有るは
なと嘲り笑ふものも多かりしは弥助夫婦も我子
おろろ持あすし行儀も直り躰の為と云手習旁々
何れの寺院へありとも遣りさむやと思ひ一家の
輩と相談しはは清洲明神町小源右衛門とて妻
の従弟ありおろろ親しき光明寺へ遣りしなり
原書より上中村光明寺とありども今知べからず
小瀬浦菴著述太閤記等より八歳の時同國光明
寺の門弟とありしと云益尻小萱津の里乃光
明寺ハ昔密宗の僧住せり後時宗とある門外三

嶋明神の祠乃傍小我の如く古き榎木あり豊臣
 秀吉公おさぬりし時當寺小入る手習いあり
 くるが暇ある時ハ彼榎の木乃本に村童と遊戯
 しむひたり壯年小至る猶昔の樂を忘るれば自
 ら木下と名乗られくるよし寺僧此口碑傳へ
 くるべしと云り萱津ハ中村と一色川を隔る西
 北小當り清洲よりハ東南に當る光明寺山號と
 横笛山と云藤澤乃末寺門外右小三島神祠左に
 八幡祠あり
 上人熟と兒の體をさくかむりの異體なる兒ハ
 後よかあは名僧智識と成るの如りと頼母し

受取くまのし習をさせらるる日吉丸を是を
 一に向小机をむくみとぬく只外に出て子供
 を集め竹木を以て合戦の體をなすいれも自身ハ
 小高き處に上りて大将なりとて數多の子供に下
 知をぬる今の世乃兒等の遊戯に山乃大将を我之
 と云詞の起原なりとゆや光明寺乃僧徒日吉丸を
 憎む言するると云と口賢く返答してあはを謂
 こ免ゆけ彼等が下知を受て爰に於て彌増よこ
 是を惡し上人に斯と告しゆば上人さあは我手
 元小侍に教訓を加ふべしとて夫より方丈に呼居
 片時も外へ出さば給仕配膳の役をなすむらに

大伴言部集卷二

日吉丸いけも坪平乃蓋を取中なるものを撮喰て
さて上人乃前へ持出たるは度重なりしは隨身
乃僧等おれを窺知くかくと上人へ告ぐは上人
日吉丸を呼ぶ汝小人あはれども師弟乃差別を知し
如何あれは師に奉る品を途中あく竊食ひ汝が餒
餘を我に進むるや所行尤不當なりと呵く一日
吉丸かゝるまゝ仰の如く毎時御膳部の御品を密
に御試仕てのち進めゆいしと上人を大切は存
考てまのる故あく身の咎を忘却仕るゆと答々
は上人も道理ははまり奇特の事ありども此後
左様の心配無用にとてと捉らむしよより然後

と撮喰をやめくくりされとて手習學問をば勤め
ど只心乃隨に振舞ふと十二歳の時なりとや本
尊乃供具を運び本堂小至り阿弥陀佛おむらひ
萱津光明寺乃本尊阿弥陀如来と尾張寺觀志小
見えり
汝人の苦患を救ふ本願ありと聞さるや疲も
飢も志けらん我持来りし飯をそとや小喰盡し
養ふべしと大音聲小言りて志むし見居りしが
頓ち棒を持来り汝いうがれむ我進めし供養を受
むらやあき奇怪と言さま振上る事と打何か
いたまはべし本尊の御首を打落るこの音小僧徒

驚きかけ来り此體をみる上人へ日吉九めふ悪業をかきつりぬと告ふより上人も急ぎ本堂へ走り来りあきれんて暫時の詞もなす
 小瀬本ふ日吉九雅心よ出家の徒と離さざる者なりと思召よるが雅意よ振舞ふ僧共よいとくもさやの心なりうは案の如くいなく
 此兒の氣分の中、沙門とをさくばして還て佛法乃障をかきと衆議一決し父の方へ送りくる日吉殿父が折檻せんことを恐追出つる坊主共打殺し寺を焼拂ふべしと敷怒り又出らむと彼僧共童をとりひかぐる恐

となく美敷帷子扇をを送り機嫌を伺ひふたりとくえ寛政本も寺中の徒密に寺を逐んこ日吉丸あを聞き大に怒り兒法師を打擲し器物を破經巻を亂し本尊如来を打摧さ様の悪行成か寺中を鬧くは住持殆育ひあぐと親里へと我歸しこれとも光明寺昔ハ七十二宇の僧寮あまひ尊氏將軍の寄附あり寺領も多かりが秀吉公よ没収せしを頼破小及ぶと尾張名勝圖會にても
 良あり上人宣ふ様本尊を破損し奉るを何と呵り何と誡むべしや疾く親の家へ送り歸さべし

こゝ即時に清洲明神町ある源左衛門を呼よせ有
體を語り此兒あり子細あはば四五年養育せし
あはれども斯てハ勿カおよむ一先歸し中なり
追て心も静りなむ又あ我教訓をも加一弟子と為
るるなりと懇言をて源左衛門も詫言さへあ
得と落涙しなむ日吉丸を伴ふ寺中を出
光明寺上人日吉丸を奇とあ如斯すて愛する
所以と考ふる一行禪師の看命一掌金ふく察
知せしむ故やあらん今其説を譯す天文
五年丙申正月誕生人ハ通天識善知識菩提識消
災識成就識佛法識の六識を具し生年ハ入道天

中なり始末を語るもあこがま只此すよ何方
へ奉公すすゆ玉へうと能く頼く歸り鳥
此時織田信秀四十歳古渡城ふあり弥助昌吉乃
舊功あは仕進の途もあふ筑阿弥ま織
田家の同朋あはば周旋の方便も有し然るふ
源左衛門に委任して庶人乃家奴隷たりしむ
ふは筑阿弥時宗より光明寺の所屬ふ故と
源左衛門色く肝煎く所へ奉公ふ有付しかども
十日と勤め送る歸さるく三十八度ふ及ぶり
母親あはと聞て親屬を集め異見を請しうと何

も清洲の源左衛門に任せらるる然るべしと評儀一
決して再度源左衛門に憑く遣はるるは此度の源
左衛門所縁ありける大工青木甚兵衛と云ふものを
肝煎め長松の茶碗師乃許へとせしり日吉丸
形容短小なまじも利口發明の性質小してよく主
人の心を知く仕へるまば三十日むりり瀬戸物
乃業減大概習ひおがえかく功積りあつたれ
名人と彫るべしと主も悦びおのひ聊踈意なく召
仕るる日吉丸あつてもちや厭てあつたは匹夫
の奴隸となりたるをききまはるるおのひ立ちり
陶工にせむせむ心の儘に遊びありきまはるる主

も案小相違し手と一品を替へ教誡しほまじも
耳も聞入る但獨氣隨になし置づさるあつた迎
三歳になる兒の傳ふたり日吉丸おのひはき
こふおのひ一日二日こ我連歩行くれとや四五日
よも成しうば右流左さるとにかまひ兒を連て井桁
の許小ゆる繩りくちと縛りほ常やあつた助る人
あるべし志むる程辛抱せよと言すて三河路さ
して出奔に

岡崎家由緒の事

并日吉丸蜂須賀小六政勝小遇事
日吉丸長松乃陶工家を出奔し東をちりて下り

くろよ三州岡崎小至りて一錢乃貯もかく又行
頼むづき方もぬし食を乞ふ庵を縁もなけきと
さばか小幼稚の體あれば人あもささく一飯を與
ふるもの、有しうば誰家とといふばあ、よ五日
六日を過しつ、岡崎の橋上小晝寐してあり、
と我

岡崎の橋と矢矧川小架したる橋を云長二百
八間當時岡崎ハ大樹寺殿乃御居城あり
嗣君ハ天文十六年八月二日尾州熱田へ入御十
八年十一月八日追御座あり然きは流布本小日
吉丸此橋上に於る岡崎の嗣君を拜せしを

記せむと誤なり依る色を削去る
爰小尾州海東郡蜂須賀村住人小六政勝と云者有
父祖より此村小住し田夫に交ると云と武藝と
好む力量も人々勝せしうば如何もして可然大
將より従ひ家と起さむやとありひ立ると同し心
の壯者ども類を以て集りいひしう三四百人小及
なり
小瀬本に岡崎乃條及び小六の段ふ一寛政刻本
に勝須賀小六政勝其手小屬する者千餘人と共
に岡崎橋を経る公と謁ると云今按は海東郡蜂
須賀村小蜂須賀藏人正利宅址あり相傳ふ正利

ハ斯波家乃末族あり此所小於百貫の領主
たり百貫の禄あり又馬一疋の武士と云正
利の子小六郎政勝なり大永六年小生るとなり
然らば公十二歳の時小六政勝廿二歳なり
小乃時三州ハ今川義元ニ屬シ尾州ハ織田信秀ハ
從フ信秀志ヲ起シテ三州ヲ襲フ信秀の嫡
子信長今年十四歳兵隊帥ハ三州吉良大濱ニ放
火シヤグク岡崎城ヲ取んと欲計ルカク不時節カ
トバ小六政勝むぢら小岡崎ニ至リ敵地の有様ヲ
窺ヒ計策ヲ施サむヤトありハ壯士等ト共ニ三州
小来リ岡崎の橋ヲ過ルコト誤テ日吉丸ヲ足ヲ踏

ト通りたる日吉丸起上レ備々無道人りか大人
小人貧富の差別ハあはれどト同トク人間ナリ何ト
て一言乃會釋をも為さずヤト答シハ政勝の從者
嘲々いこく往來の橋上ニ倒レ臥スあるハ鹿忽ニ
自身人の妨トあるづき處小なりたふとば思はば
却テ人を咎ルコトヤ不當カキ手足ニ疵の付ざら
を徳トかりへよヤト嚏ト笑フ日吉丸橋ハ往來の
た免なり我も往來の人なり然らハ我も橋の主ニ
主リ臥スハを鹿忽ト云コトヤある跡より来ク先ニ
居スハものニ禮ヲぬ人ヤあふづきされハ無道人
ト云コトコト政勝ハ色ヲ聞ク小賢トク口

大岡己刀編卷二

二

この哉頼輔車も人あつて形くばき者よ有べし
此國乃りおろと云日吉丸我を尾州の愛智郡の者
みて歳十三と答ふ政勝さうい我同國同郡乃者之
外あつばおろふぞや抑我いおの岡崎小道をよ
さ仇を祓らふもの形り小人を承く此家を知りや
と云日吉丸これ其家の案内い見知りい然
後又續さふ我まぐり入る門の戸を開くべしと云
り門の傍乃柳樹を傳ふ内小入さて門を開き
くば政勝おろふまぐり打入る働き今い是まぐり
形り近隣の援来らば先小引やと退るが日
吉丸を見ういぬ政勝かの小人此國乃者あ

バ我等り體よく知り追捕のためは回て忠を
為たるうも又尾張の者あつ仇の家は捕へらと
たらんハ可愛うふ一如何せん云處へ出来ぬ
何さう後を何とて来るまやと問日吉丸火
あやうと思つて残り止る見めづはうら小人
多く出来て遁き難げふは大方石を取て井
の中へ落し聲を上り叫ぶおに人か井のほと
は集りいお志けう門を出て来りつと答ふ政
勝とどめ餘の壯士等その智略はたけしと舌を
巻く甘心さうと形り
流布本小峰須賀小六公を案内者さうて岡崎の

太閤己の編卷二

富家^{ふけ}に押入^{おしこ}亂妨^{らんぼう}し財寶^{ざいほう}を奪去^{うば}よしと記^しを然^{しか}バ
政勝^{せいしょう}の所行^{しゆく}草竊^{そうせき}姦宄^{せんけい}の一盜^{いつとう}たる殘免^{ざんめん}と凡^{まづ}

重修真書太閤記初編卷之二終

重修真書太閤記初編卷之三

日吉丸^{ひよしまる}即智變化^{ちくちへんげ}の事

并蜂須賀小六路金^{へいしんがせうろくご}と失ふ事

蜂須賀小六壯士等^{へいしんがせうろくしやうら}と共に三州^{さんしゅう}に留^{とど}り種^{しゅ}々に方便^{へんべん}
と運^うらばと云^いむ岡崎^{おかざき}方乃^{かたのち}用心^{うしん}さびしき事^{こと}是^{これ}
れぞとあり良策^{りやうさく}もかく一先^{ひとまは}尾州^{おしゅう}へ引返^{ひきかへ}し々^しか
日吉丸^{ひよしまる}の舉止^{きよし}尋常^{じんじょう}のそとに末頼^{すえのり}母^{はは}の思^{おも}ひ
より是^{これ}をも同道^{どうだう}しておのが家^{いへ}に止め置^お色^{いろ}く乃^の計^{けい}
略^{りやく}を儲智惠^{もろちゑ}くらべし遊び戯^{あそび}を々^しふ日吉丸^{ひよしまる}が
云^い我^{われ}は乃^の國^{くに}の陶工^{たうこう}此家^{こゝ}をおかすは出奔^{しゅつほん}せし

なまは腰刀一隻も持ばあはれ我もさりぬべし
 刀一腰さけ與へ玉へと所望せしは小六政勝聞
 て尤なりとて相應の短刀を取出し與ふ日吉丸
 といひ鈍く見ゆる形りなふとて我所望の刀賜り
 てんやと云政勝その刀鈍くを何とぞされ共小人
 乃所望の刀を何形ふ刀とぞやと問日吉丸いづや
 御邊の今帶し玉刀とぞやと思ふと云政勝是は
 青江村正乃作し我が家の重代なり
 古刀鑑定祕事録に伊勢國千子村住村正貞治項
 應永項永享項と三代を載て青江村正と云もの
 ふし青江に備中國青江住安次同ト處住則高乃

二家と載然とて青江の流ふ村正と云ものふし
 小人乃望ふ應とて與へ難し此外よて何をなり共
 請ふよるへしと云日吉丸大ふ不興氣ふしとて大
 人の詞とも覺えぬものうな最前されは隨ひるば
 何ふも所望ままうはべしといふとて是非を
 小人も又親祖父より傳りたる身を委ねる從ふ
 ものといふはば刀をばあしとて後
 一腰強さへはるど小惜しとおもふは後
 とくも頼りしはと云政勝大ふ迷惑しいやと
 よ刀を愛惜と思ふ計ふあはれ今我は從ふ壯士等
 しか此刀我所望せり然るは我更ゆるさるる

を忽小小人と與えは大勢の志を破るべし然ハ先
の如く云し形り誠りくハ佐々木高綱う生喰を
得し如く我にあつさば取よかさあは他の恨
も阿ふべうに我詞も立道理なりと云日吉九悦
ういうあを御邊の知ぬやう小取辱し詞を違へ玉
ふあうと約束して座を起ぬ政勝その夜を刀を枕
上小あさ熟睡せし體ふりて形りまてさゆ日吉
丸出来ばや乃翌日もおあう様ふして待々ふ足
音もせを政勝日吉丸を招さいうよ約束せし刀を
取さうやとあうとさば日吉丸やが取りべしさふ
とふせうを玉ふとあうと云政勝いふとよせくふ

と何し補ども小人乃作業あまり遅くすふを以
催促する形りたがし猫の額より有る鼠が覗ふ
と云譬の如く臆し取さふなるべしと云ハ日吉
丸鼠より取猫ハよく寐と云り油断なくあ玉ふか
よと云

流布本より日吉丸来らば大怖して再び来ら
ざる様小懲させんとむと思ひく能寝入を体
體をかしく終夜相待々も日吉丸来らば扱
ハ口むあり利口なせども流石少年ゆ急恐とく
来らばるふんと夜明とハ日吉丸を招さ如何
なせば刀を奪ひ取さふやと云日吉丸聞えい

おも夜前忍び入んと存せしが御先祖傳來の刀
 我身に不相應と存り付てゆへを俄小所望此志
 を止めりゆと云といひ繪本を其夜も我乃次
 の夜も日吉丸曾ききさらば第三日の夜雨頻
 降て物もごきよ小六今宵こそ日吉丸来るめ
 と心を配りてまの程小刻過る比雨どりの下
 に人ありと覺く笠よ雨の當る音もさうりふれ
 バ叔を猿めが忍び来り我寢息を伺ふよと我有
 慮々としてありひ息をほめ待りど小夜ハのく
 と明渡を猿ハ終よ来らば今ハちや心安くと机
 小よりと聊依ふたり々ふが漸あけり目さ免

あつりを見りよ彼村正なりと記を今爰小擧る
 處ハ稲田某乃記小従ふ
 政勝あぶ笑め口賢小冠者うる何と油断を
 べさと云て兎角す程よこ乃刀を見りしおひぬ
 然ども日吉丸ハ今日一日見えぬものを去と
 彼小人ハい何とトリをとり我小屬を壯士等
 尋問へむ我のともい今朝よ日吉丸ハ村正乃
 刀を帶して歩行さ故いうめり得らるを打
 寄たづゆゆ此日頃約束して漸今朝手に入
 ありと答ゆと云政勝大驚き日吉丸をよべと
 呼出しみよバ實り長き刀を前垂りはほふら

て出来り所望の刀手小入る悦びうさで那うと云
政勝いかうと取らる我餘り小不思議なりその
手立を語ると云日吉丸大人と心付むをばり
まや叔もく油断なり今朝いひも此如く竹椽乃掃
除せし時小刀をば何とあされしやと問政勝暫く
案して我の時小人の庭小立る掃除する女子の持
来りし水桶を打返し犬を座敷へ追入る奥庭此方
へ逃行しにあはばやと云日吉丸いりあは水桶を
打返し志うば座敷中へ漂い刀乃柄下緒ぬきぬぐ
見えし小より大人あきて刀を付書院の上小載
我を追る庭へ下立りひし小あはむやそれら我

庭より走り歸り彼掃除の女子は大人乃刀付書院
の上あり取らるよよと宣ふ形りつと給へと云
ハ彼女子取て我小あはしなりさて約束しはふ
定おれバかく帯して快よく覺ゆるやと云
流布本小所望の志を止らさて晝寢のむまに取
らハ無道形りと叱りてとさ猿ハ所望を止むと
云くはるを寢るを覗く取らる虚實變化なり
と云しと記す
政勝も日吉丸が智略を感し刀ハ我のまゝ與へ且
十三歳の小兒れをかり計策をかき我刀を取
ほると勿く凡人の業ふとと末頼母しと思ひく

大開己の馬

弥親しくねしとあり翌は天文十八年二月蜂
 須賀小六政勝心願乃事あるよ依く伊勢太神宮へ
 参詣を相従ふものハ日吉丸外小二心形き壯士
 二人を具たりたり陸路を事六ヶ敷々を日光
 川を船みく蟬江下下伊勢の海路を帆杖舉る瞬
 息小大湊よ漕より宮川小垢離よりくさて
 山田の町小至り杉山大夫と云御師の許と宿し
 兩宮順拜して歸郷せしとあり

流布本は政勝宮川小垢離より時路用の金と失い
 大小困窮し杉山大夫に金と借しよわげ日吉丸政勝
 と勧めく杉山が家を出妙見町の餅屋新五郎が家小入

て餅と食しうの鳥目壹貫文を借しと載且新五郎
 後小御師と有り橋村吉大夫と稱し阿州より五十石の
 俵子を受る由と記し又政勝上京し鞍馬寺へ参詣し
 薬師坊快順と云坊と宿しそ在し悪心と起し金
 と奪く立退んとせし不動の縛よわく五體麻
 痺して動くことあさり恐怖して懺悔し快順の教小依て
 暴悪を止し由と録せり今考小政勝の藏人正利が男
 少く足利修理大夫高経乃末孫と云り政勝大永
 六年又生れし天文十八年ハ二十四歳なり織田
 十郎左衛門尉信清小屬し犬山城みく鎗下乃高
 名せし由高名記に之也十郎左衛門尉信清ハ織

田彈正忠信秀の弟與二郎信康の二男あり信康天文三年稻葉山小戦死し信清信長の妹小添て犬山城に住せしが所領を失ふ甲州に客とて薙髪して犬山哲齋と稱し信玄の御咄衆とて但政勝織田七兵衛尉信安小仕と岩倉城あり岩倉破とて美濃國小入齋藤道三と仕ふと蜂須賀譜小云は信清信安と仕し弘治二年四月道三戦死乃前なるを論ふ岩倉合戦永禄元年七月ふして政勝三十三歳の時ふ當り道三戦死より後なり然とてハ岩倉破とて後齋藤と仕しふをわはば犬山城主乃記を考ふふと信清犬山と去る後池田信

輝犬山と主とると云信輝の犬山に入ると元龜二年なりと云は信清の犬山と失ふも亦その項なり然る時ハ政勝乃履歴今傳ある所と異おる流布本ハ政勝天文十八年鞍馬参詣を四十年の時と云ハ大誤なり日吉丸とゆは政勝が許ふ兩年の居諸を過して久ふと近きとてなり形とて中村ありハ更小知と云く如何ふありはらん何處と住やらんと日吉丸の母乃思ひを屋敷とておく明し暮しけると云も理なり

日吉丸古郷中村小飯事

并日吉丸老婆は食を求る事

天文十九年の春ありぬ中村あり日吉丸長
松を出奔して行衛しとばとや三年をもすごせり
生るあはば如何ある風のたよりふろ知しりの有
べさよ絶て音信のなきはあも今とせよ無人乃
數に入しや今年ハ十五歳ハ成な色はさば
あど形さ幼態もあをまぐきになも母を歎けども
今乃夫筑阿弥は斯とも言う祢たは清洲の源左衛
門小の如何ありて尋出しこれ見せ玉へと
泣く頼みしは源左衛門よあも氣の毒おありひ

心安くうけがひく處くと搜し求めたり

流布本小父弥助ハありし子細ありとく少しも
かふしまば又案どるけしきもかるとも今按
天文十九年の弥右衛門昌吉没後八年ふして
天瑞寺夫人卅七歳公乃姉瑞龍院日秀尼十七歳
小一郎秀長十一歳南明院大夫人八歳の時なり
此四人を筑阿弥の養ひを受ると云ども公ハ幼
より處くと流牢して筑阿弥の養ひを受らば
故小筑阿弥も又公を子とせざると聞ゆ
又か乃青木勘兵衛も母乃歎きを傳へ聞くとくろ
は哀小覺へしは是も共く尋祢しかども更は影

向もかゝ然るゝ勘兵衛三州へ用ありて立出し小
能次なるとは熱田明神へ参詣せんと熱田路へ赴き
ふふ不意も日吉丸小行逢り見まがみ屋を小
河へ移す日吉よちても久しく何方ふり在り母公
の歎き乃るるやとあげなる餘所の見めも忍むれ
ど我等も彼處此處と探求めしかどを見當ら祿は
三州路へ用もあり彼國に至り尋むやのころ小
て今立出る處ありまがみ我等りやとへ来よと
青木の家へ連歸り今まて何處に居りやと問は在
はるその始終を詳小告りは勘兵衛大ふおろき
蜂須賀乃小六政勝と云ら犬山殿の旗下あゝ今の

名古屋乃織田殿といはれの中睦しやとまきけで
御身が今の父筑阿弥は名古屋の御家人なり政勝
り許小あると然るへりてと云
此項尾張ハ斯波家の領國なり文明九年斯波左
兵衛督義廉京都武衛陣の館と出づ當國小下向
春日井郡清洲乃城小住し春日井海部丹羽中嶋
乃四郡を領し愛智知多ハ今川家の領なり義廉
卒して嫡男治部大輔義達家を継ぐおろく清
洲小住し義達隠居し嫡子治部大輔義統家督
たり天文十九年の義統の代なり織田備後守信
秀ハ斯波家の長臣清洲三奉行の一なり始ハ海

大岡己刀編卷三

部郡勝幡の城主より享禄五年の春奇計を以て
 り那古野乃城を奪ひ城主今川左馬助氏豊茂逐
 て信秀那古野に住し勝幡城の廢せし然るも
 天文三年吉法師丸誕生あり後那古野の南乃
 方古渡と云處に築き新城と信秀は移り那古
 野を吉法師丸を以て城主とせし天文十六
 年信秀また那古野の東末森に築きて移り住し
 けるが去年三月三日信秀卒し吉法師丸家督を
 吉法師丸に即上総介信長なり然ハ天文十九年
 清洲ハ斯波治部大輔義統の居城那古野ハ織田
 上総介信長末森ハ信長乃弟勘十郎信勝犬山ハ

信長の從弟十郎左衛門尉信清乃居處なり
 又流布本小蜂須賀小六といふを野武士強盜の
 棟梁之をれが許し在る然る處りし記し
 誤なり野武士と云は上古兵士その國乃軍團小
 入し追ふる京都の衛府小仕ふるをさきとものを
 云衛府に入しを父祖乃譜第を追ふる重代此兵
 士と云重代して京小宿衛をて侍品と云此勤
 勞なきを黨の兵士と云即野武士の事あり詳小
 別書あり依るべく説く
 清洲乃源左衛門ハ日吉丸が青木が許へ飯と
 聞こを訪人と立出る處へ青木と日吉丸と連立

明神町へ来るは行逢ひそれより源左衛門が家
 へ入る始中後の物語しけふは源左衛門と勘兵衛
 と相談していげとみと小六政勝は許小在る然
 不へうは勘兵衛を三州へ赴く便道外は中
 村へ至り日吉丸が母を知らせ玉と致す源左衛
 門は蜂須賀小至り日吉丸が暇を取べしと東西へ
 立別と政勝が許は赴き日吉丸が今迄養とれし恩
 を謝しけり源左衛門が方へ引取んとを請ふふは
 政勝もたゞ三州より同道へ来つるまでふく主従
 と云ふも何は日吉丸が智略によりて我利を得
 たるも少くは福を養ひ恩小似て恩小あはば

御邊ハ親屬のとり日吉丸がとありは計らひ
 ありまは但彼少年尋常の性質なれば政勝あはが
 及ぶ慮さふは福を鬼も角も言はさふをいふ福と
 御邊あはの意し世話ありと届くべうは
 と快げは會釋しつと源左衛門悦び歸りてとめ
 よと彼是と心配も志しと今すとし介錯して見
 らやとおひはまは我家小かくまひ置くるは源
 左衛門が家事小を聊もあはつるを恐る心の隨小
 遊び歩行き食事の比は歸り来り食終とバマス
 出行の後を源左衛門が妻子あは日吉丸を憎む
 と云とも將為あけとバあされとて我居るは鬼

折ふ一青木勘兵衛が同職小與左衛門と云者あり
海東郡二寺村大工與左衛門と云者あり福島左
衛門大夫正則の實父なり爰小所謂與左衛門と
同人ある一
清洲城中の普請を請負り日く工匠を多く催促し
て入るるは無人あり如何なる者少くも手足は
動さなば分小應じて賃銀を與ふべしと云勘兵衛
源左衛門小相談し日吉丸成與左衛門が家小送り
遣りしはば與左衛門悦びまげ日吉丸は大工等
乃食物を運ぶ役を充て使ひ試むるは日頃の氣隨
みを似も付ば持運ぶ刻限すとも違ひ湯水の

加減を心小協ふ様は動さるれば與左衛門を
免他乃大工等まぐ又ふきものと思ひ勞めて
飯屋の内は休息させけふほど小普請を奉行する
清洲乃役人もあをを見知猿ふくと呼ばる心安
くもふし形どする様ありにり爰小誰かは知
る飯屋の内小帳を取る普請の日記を書居り猿
ハ元より人と人と思はぬは我の側へさし寄て
叔能御書ふされいりけり物書はかりしは
知行ハ賜りるものなるやと問彼人莞爾と
しひいりしも大名の家を右筆と物書を能
ふ知行を宛かす形りと云日吉丸聞かぬ

るど小書とい大低あゝ成より知行ハ何れど取
 せぬと我と問彼者我を並に勝たりとく五百石
 と知行とと最りとらしく云日吉丸さて此普請場
 あゝ大工等小賜と我扶持米ハ如何れど宛出ぬや
 と云彼者何様よく問とを積りてん凡大工等一
 日二百人も出べし然らば米凡二石に當ると云
 日吉丸然らば一年も米七百廿石ぬりあゝこの
 禄より二百廿石多し左もど修行しぬとやうく
 五百石とら少あゝとらふと手と拍く笑ふ彼者大
 怒り憎き雑言かな武士を嘲哂せし誠めよ首切
 る呉んるとと旬る日吉丸ハ足むやと逃歸りて咤言

もせぬ彼者まゝく憤り與左衛門を呼付是非に件
 の猿めを連れ来れ左もぬく其方成相手とせん
 息喘を他の大工等まで打より様く小侘言して漸
 彼者の怒も静まりしぬと與左衛門も家も飯も然
 日吉丸を呼く尔くと叱りて教訓せし小
 日吉丸ハ彼者腹を立し心の狭き故なり我彼者
 の氣をさげまゝ呉んと思ふ大工等の扶持料は
 及ぬと言しと却り怒り我を切んぬと云ハ真
 愚人なりと空う我あゝせしら笑ふよ今
 ハ與左衛門も力あゝづ勘兵衛が許へ送り返を
 勘兵衛も將為あゝ源左衛門小かくと告しうば中

村乃筑阿弥の許へ還し日吉丸がとい我々が力
及ぶはと云然るは筑阿弥いあり子細有とく
異見も加え又叱りもせむ母むとり心を苦め誰
を頼まんと案じけるは叔父五郎助り子の五郎
作と云ものも母乃從弟あとも幼稚のれど叔父
の家小養りとも兄弟の如く親しめしうば五郎
作は日吉丸の事をいうよとと頼む五郎作は
鍛冶の業をかゝるとは日吉丸を呼取り弟子とせし
その業を教ふは五日六日ハよく習ひくとも
日數ふるほどに又例の如く遊び歩行空腹の時小
つゝ立歸りくともは五郎作り妻子もくは思

ひ果く敷膳をさくめも為さざりやば極め遅く
ありし時ハ此村もげと小寡女あり産婦の世話か
ごしと世を渡るものありは日吉丸が産むし時も
定めて介抱したりと日吉丸を能知言交しけ
る縁あり立より空腹なりと云寡女心よく呼入
る飯成與へくともは日吉丸大悦ひ我程なく立身
せば一粒萬倍もて返さずと云寡女いやとよ我
々の報を得んとく御身小振舞あよあは御身が
大言を人乃譏るあともはかまつく左様のと言あ
あよと誠むとバ日吉丸言く悪くハ言もせし去共
我心よりか思あよより言ありとく立出日暮とバ

大問己の編末

二〇

亥

申

己

未

谷



五郎作ら家小飯る斯る處へ近江國多賀の社乃觀
 音院順光坊と云僧東國小配札せんころ立出し
 召具したる下人病く大とあさより誰り東國まで
 我小從あさ下向ささやと人を雇ひ求る由を聞
 て五郎作日吉丸と如何せんとい訊日吉丸一議あり
 及む順光坊小從あさ東國と下向さ
 多賀社ハ近江犬上郡とあり祭神一座伊弉諾命
 なり社領今三百五十石別當ハ真言宗不動院と
 國花萬葉記と見也

重修真書太閤記初編卷之三終

